

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報 (総合)

中村 元 慈しみの心

No.517

道を学ぶは、明かりを持って暗室に入るがごとし。道を学び、道理を知ると、知らないことがなくなる。

(『四十二章経』)

△解説▽世間は無常であり、思うようにならない、己のものは何一つないことを知ったら、世間を見る目が変わる。己の生き方も考え方も変わる。むさぼりや怒りやおごりに悩まされたり、煩わされたりしなくなる。心が晴れ晴れとなるはずである。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.4.15 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.516

道を得る者は男女の差別なく、いずれも道を得る。いずれであれ、道を得た者を敬い、重んずるべきである。男女を論じてはならない。(道元)

△解説▽釈迦の説法には女性差別の発言はなかったが、紀元後の創作仏典では女性を蔑視し、女性は仏法に縁なき者と説いた。道元も仏法を学ぶ上で男女の差別はないといい、仏法を修得した人に男女の差別はなく、等しく尊敬すべきと述べている。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.4.14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.519

わが生は奇するがごときのみ はじめより適くところを扱ばず

(北宋・蘇軾東坡)

△解説▽人の生涯は仮にこの世に身を寄せたようなもので、最初から行くところを選んで生まれて来た人はいない。生まれ落ちて、さあこれからどう生きようかと考えてきた人がいようか。なぜ生きているのかと考えると悩みは尽きない。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.4.17 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.518

我々は生まれ、生まれ、生まれ、生まれて、生の初めについて暗く、死に、死に、死に、死んで、死んで、死の終わりについて冥い。(空海)

△解説▽誕生前、己が父母のどちらにいたかを知る人はいない。父母にはまた父母がいる。さかのぼると己の存在は分からない。死後の存在も不明である。体験した誕生前についても、未体験の死後についても、人はなにも知らない。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.4.16 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心

No.521

生者必滅の道理を無視して百年を生きるより、一日を生き、この道理を熟知することのほうがより勝れている。
（『アバダーナ』）

△解説▽作られたものは無常であるという道理を知らずに、いたずらに長らえて生きる者はあわれと釈迦は説いた。生者必滅の道理を熟知したら、たとえ短命で終わっても不満はない。長寿も短命も必ず死を迎えるのだから。

田上太秀・駒澤大名善教授

2017.4.19 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.520

これまで富を得た人は多い。しかし富や名声とともに、彼らはいずれに去ったのか。だれもまったくその跡を知らない。
（『入菩提行經』）

△解説▽財産を築き、名声を得て、高い地位に就いて一生を終わる人は多いが、手にした財産や名声や地位は来世への土産とはならない。死後、それらは朝露のように、かげろうのように消えて、跡形がなくなる。

田上太秀・駒澤大名善教授

2017.4.18 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.523

年年歳歳 花 相似たり
歳歳年年 人 同じからず
（唐・劉希夷）

△解説▽毎年、草木の花は咲くが、毎年、その花々を見る人は違ふ。花々もそれを樂しむ人々も、毎年、同じ花で、同じ人であるとはかぎらない。花も散り行く。人も、来年年あつて来られるとは言えない。今を存分に樂しむことだと教える。

田上太秀・駒澤大名善教授

2017.4.21 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.522

朝早くに見かけた人のなかにも、夕方、会えない人がいる。夕方見かけた人のなかにも、朝早くに会えない人がいる。
（『ジャータカ』）

△解説▽「行ってきます」「また明日ね」と言った後、すぐに事故で亡くなる人もいる。読経が終わって仏壇の前で往生する人もいる。死は時も場所も選ばせてくれない。死は人を迎えるのか、引き込むのか。死への旅に道連れはいない。

田上太秀・駒澤大名善教授

2017.4.20 中村元記念館協力